

# 伊藤 真利子(いとう まりこ)

准教授

専門分野／経済学

学歴：青山学院大学大学院経済学研究科博士後期課程中途退学

青山学院大学大学院総合文化政策学研究科5年一貫制博士課程学位取得済み退学

学位：学士（経営学）青山学院大学、修士（経済学）青山学院大学大学院

博士（総合文化政策学）青山学院大学大学院

著書：伊藤真利子『郵政民営化の政治経済学—小泉改革の歴史的前提』（名古屋大学出版会、2019年）

ほか、論文多数。

## 夏のとおきアニメスタジオジブリ『火垂るの墓』—

みなさんは、スタジオジブリの映画「火垂るの墓」（1988年4月公開）をご存知でしょうか。「4歳と14歳で、生きようと思った」（糸井重里）をキャッチコピーに、戦時中から戦後まもない日本を舞台に、兄・清太と妹・節子の姿を描いた作品です。みなさんにとっては、高畑勲監督作品である「火垂るの墓」と同時公開された、同じスタジオジブリの宮崎駿監督作品「となりのトトロ」のほうが親しみ深いかもかもしれません。私にとっては、アニメとして気軽に楽しめる映画ではなく、鑑賞するたびに苦しくなり、涙が止まらなくなってしまう、心の準備が必要な作品です。

原作者である野坂昭如の回顧談によれば、この作品は執筆するつもりがなかったそうです。締め切りに追いまくられて仕方なく喫茶店で書き上げた原稿で、作家本人にとっては全くと言っていいほど思い入れのなかった作品だったようです。しかし、自身の作品の存在を忘れたところにアニメ化された映画を（さほど期待をせずに）見たところ、高畑監督の現実味溢れる演出に号泣し、泣きながら試写室から飛び出してきた、という逸話が残っています。

この映画は、「昭和20年9月21日夜、僕は死んだ」という主人公である清太の衝撃のカミングアウトとともに始まります。とても印象的で、重い一言です。妹である節子は、そのひと月前の8月22日に非業の死を遂げています。少し冷静に考えてみれば、第2次世界大戦の終結は8月15日ですから、二人が亡くなったのは終戦直後ということになります。このことを知ると、さまざまな疑問がわいてきます。歴史に「もしも」はありませんが、もし彼らがラジオで「玉音放送」を聞いて、終戦をきちんと知っていたら、あるいは、もし二人がもう少し大人だったら、違う行動ができたのではないか。もしお婆さんの家を出なければ、節子は助かったのではないか。せめて節子が栄養失調になった時に、預金を引き下ろしていたら、彼ら二人の状況は変わったのではないか。「4歳と14歳」は、たんに「生きようと思った」だけでなく、生き抜くことができたのではないか？

こうした問いを踏まえ、戦争そのものだけでなく、こどもゆえの情報収集力と判断力の欠如が、この物語の悲劇を招いたのだと感じました。同時に、原作者が過酷な経験の中で無意識に表現したもの、あるいは避けようとしたことを鋭く描きだした高畑監督の読解力、人間観の深さを感じ入りました。

## 閲覧者向けメッセージ

日本の敗戦から 80 年が過ぎました。しかし、世界に目を向ければ、今も戦争はなくなっておらず、多かれ少なかれその影響が私たちの日常にも及ぶようになっていきます。ぜひみなさんにも、映画で綿密に仕込まれた「大人」の意図を読み解きつつ、戦争が人間に何をもたらすのかを考えてみるきっかけにしてほしいと思います。